

281. 高島郡安曇川町田中 採集遺物について

1. はじめに

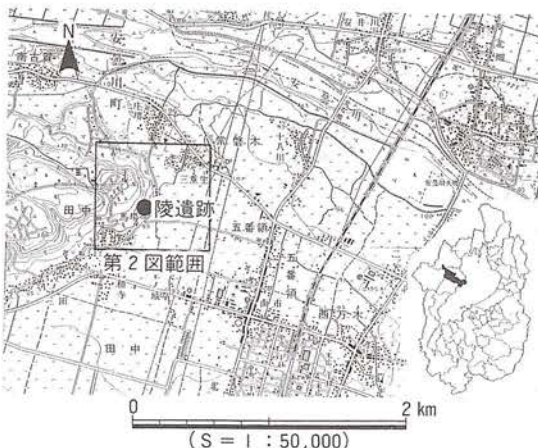
琵琶湖の西岸に位置する安曇川町は、2億年以上も前に形成された古生層からなる山地帯および1万年以降より堆積した沖積層により形成された安曇川平野からなっている。安曇川の流れてもたらした肥沃な扇状地には、南市東遺跡や下五反田遺跡に代表されるように弥生時代より大規模と思われる集落が営まれていた(文献1・8・14)。また海人族である安曇氏の系譜もうかがい知ることができる。

今回報告する遺物は、安曇川南岸の泰山寺丘陵裾部、標高100m付近の安曇川町大字田中(通称：大字陵)字山崎において採集されたもののうち、瓦類についてである。

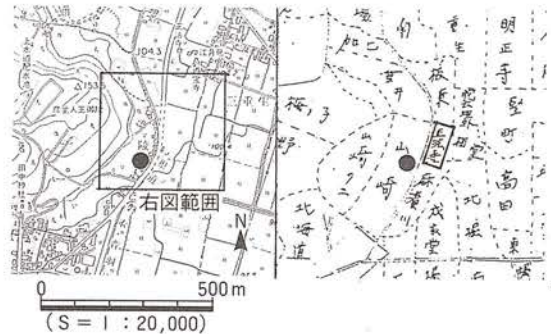
なお、当該地の南約50mの所に継体天皇(袁本杼命・大迹部皇子)誕生地伝承の旧三尾神社、後背部西に約200mの所に田中古墳群の首長墓とされる王塚古墳(彦主人王陵墓)が所在する。

2. 採集の経緯と経過

遺物の採集は、平成6年(1994)に自宅裏庭の土取りの際、表土直下の黒褐色土中からの須恵器片の発見に端を発する。後日その付近の黒褐色土中より平瓦30



第1図 陵遺跡位置図



第2図 陵遺跡周辺図(左図)と周辺小字図(右図)
(左図は安曇川町都市計画図に修正加筆)黒点は遺物採集地点

点、軒丸瓦1点、石斧・タタキ石・石錘等の石器72点、縄文土器を含む土器片200点余りが出土した。遺物が出土した範囲は土探し範囲のほぼ全域に広がっており、遺物の分布はさらに広がる可能性が高い。また遺物採集地は周知の遺跡の範囲に入っていないことから(文献1・2)、遺跡の名称については採集地の旧大字名を冠して陵遺跡と仮称したい。

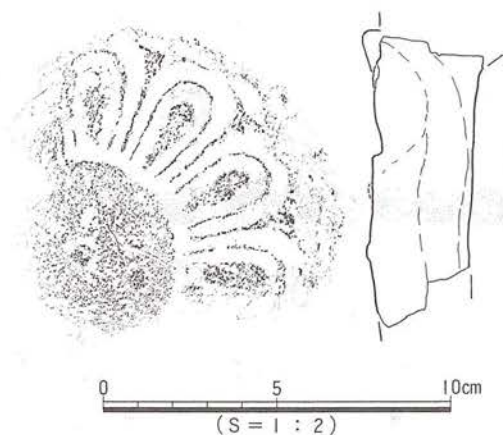
古代の遺物に関しては、採集地が丘陵縁辺部にあたることから考察すれば、丘陵斜面において窯跡の遺構が存在するのに都合良い状況と考えられるが、今のところこれに類する遺構や遺物は確認するに至っていない。このため、採集した瓦類が瓦窯に伴うものか、あるいは寺院に所用されたものか判然としない。また、縄文時代の遺物についても土取り作業後の残土から出土したものであるため、出土状況は不明とせざるを得ない。

なお、出土資料数が多いため、今回は瓦類の報告のみとし、その他の資料については機会を改めて報告したい。

3. 採集瓦類について

採集された瓦類は、軒丸瓦1点と平瓦30点の計31点である。

軒丸瓦 軒丸瓦は、細弁十二葉蓮華文軒丸瓦の一部で、丸瓦の接合部分の一部が残る。外区外縁は剥離によって形状が不明であるが、素文の外区内縁は内区とかすかな段で画される。凸線で表現された花卉の中には外側にやや広がった断面がゆるい弧を描く子葉を持つ。



第3図 陵遺跡出土瓦実測図

この花卉を囲むように羊頭形の間弁が長く中房にまで達し、間弁の断面形状は外縁に近い部分で軽く反りあがっている。中房は花卉から一段盛り上げて花卉と隔し、断面がゆるやかに弧を描き張り出したものである。ここに圏線を持たず、かすかな隆起で表現された蓮子が現状で4箇所確認できる。これを復元すれば蓮子は1+8に配されているものと見られる。文様は全体的に平面的ではあるが整った印象を受けるものである。

焼成は不良で軟質、淡褐色を呈している。胎土は粗いチャートおよび長石粒と、細かな石英・クサリ礫および雲母を含む細かなものである。

一部に丸瓦凹面の布目が反転して残り、また丸瓦端部の圧痕も残され、丸瓦接合部分で欠落したものと見られる。花卉部分には顕著な范詰めの際の粘土充填痕が認められる。また、外縁部分は粘土の接合部分で欠落しており、成形台を推測できるような痕跡は残されていない。

以上の状況に断面に残る粘土充填痕の観察と合わせて製作過程を想定したい。まず、花卉部分→中央部分と粘土を充填した後に、瓦当裏面に円盤状の粘土で瓦当の厚みを作り出したと見られる。ここに丸瓦をやや高い位置に差込み、粘土を補充してナデによって接合を行っている。これは、いわゆるはめ込み式による接合の範疇に当るものである。瓦当裏面は一方向のナデによって成形されている。なお、外縁部分は花卉部分の粘土充填より先に粘土が詰められていた可能性が高い。

この軒丸瓦の瓦当文様は、安曇川の対岸に位置する大宝寺廃寺出土の細弁軒丸瓦に類似するが、中房の径や蓮子の表現が異なっている。また、今津町大供廃寺出土の細弁汁葉軒丸瓦に文様構成は類似するが、弁の形状が若干異なる。これらの軒丸瓦の文様系譜は機会を改めて検討したい。

所属年代については、細弁形式の一般的な年代観から、8世紀後半から9世紀頃に置くのが穏当と思われるが、年代観の確定には資料の絶対数が不足していることを考慮する必要がある。

平瓦 平瓦は30点が採集されているが、いずれも小片が多く且つ摩滅したものが多くことから大まかな傾向を記すのみに留めたい。30点のうちタタキ工具痕が明瞭に残るものは3点のみで、粗い斜格子のものが2種と粗い正格子のものが1種が認められた。これらはいずれも暗青灰色の硬く焼け締まったものである。また、かすかに縄タタキの痕跡の残るものが数点見られ、いずれもこれらは黄灰色で軟質のものである。その他の破片については青灰色で硬質なものや灰白色あるいは黄灰色で軟質なものが見られ、後者の方がやや多い。

製作技法についても資料上の制約から復元することはできない。

これら平瓦の年代観は、大きく「古代」の範疇に入ると見るよりないが、ここでは軒丸瓦の年代観と大きく矛盾するものではない点を確認するに留めたい。

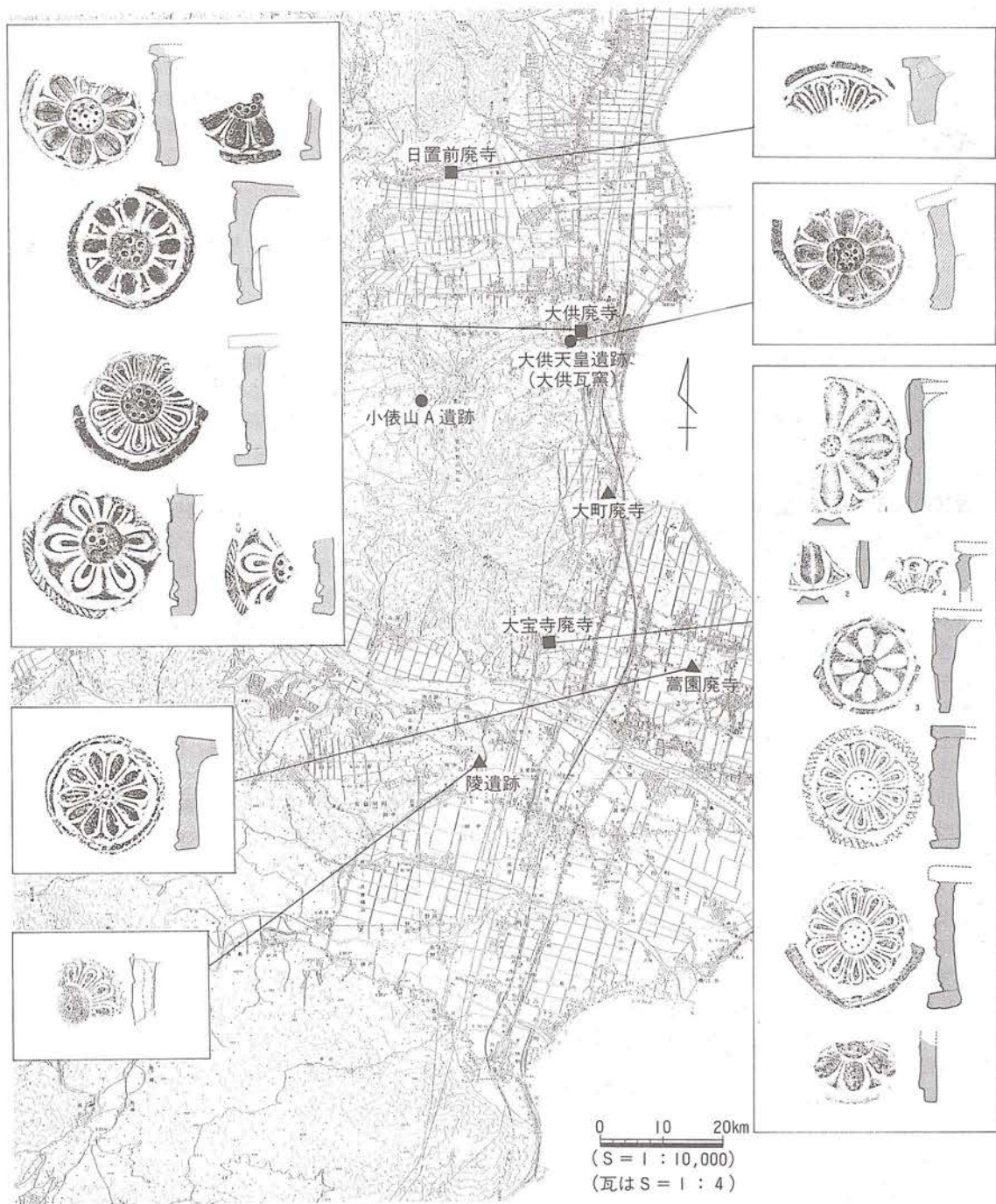
4. まとめ

高島郡の古代寺院 近江は旧国単位で全国有数の古代寺院が創建されている。このような状況の中で高島郡は近江の中でも比較的古代寺院が少ない地域と見られてきた。遺跡ごとに若干の資料紹介がなされていたが、本格的な研究は近江の古代寺院を集成した文献3において西田弘氏が高島郡域の古代寺院を集成したのにはじまる。西田氏によって検討された古代寺院は、日置前廃寺・大供廃寺（以上今津町）、大宝寺廃寺・正法寺南遺跡（藁園寺跡）・大町廃寺（以上新旭町）の5遺跡である。^①その後、古代寺院と官衙との関連からの研究（文献4・5）や北陸道と若狭道および琵琶湖水運との結節点にあたる高島郡の交通の要衝としての側面からの研究（文献6・7）が若干おこなわれるが、余り盛況とは言えない。近年、安曇川町内の下五反田遺跡において「法隆寺式」軒平瓦の出土が報告されたが（文献8）、その位置付けは未だなされていない。現時点での研究課題としては、研究対象が高島郡北半の今津町および新旭町を対象としたもので、高島郡南半の安曇川町および高島町を含めた高島郡全域についての研究が行なわれていないことが挙げられる。

現在の限られた資料からみても、前節で述べたように文様構成の類似した細弁系軒丸瓦が大供廃寺・大宝寺廃寺および陵遺跡において出土する点は注目される。この点については、機会を改めて論じたい。

以下ではまとめにかえて採集地および採集資料に関する問題点をあげておきたい。

正法寺について 採集地の県道を隔てて隣接する小



第4図 高島郡における古代瓦出土遺跡と主要軒丸瓦(■：古代寺院推定地、●：瓦窯跡、▲：瓦採集地)

典拠 日置前廃寺・大供天皇遺跡(大供瓦窯)「今津町内遺跡分布調査報告書」今津町教育委員会 1990
 大供廃寺「今津町文化財調査報告書第2集」同 1983
 高園廃寺・大宝寺廃寺「近江の古代寺院」(文献3)

字正法寺が存在する。現在正法寺に関連する寺院の遺構の形跡は全く確認されていないが、同名の寺院が北東約400mの位置にある三重生集落に存在している。同寺は「天文五年十月河副筑前守開基…(中略)…寛文三年十一月丹山和尚、開山。」(文献9)とあり、天文五年当時は現正法寺の位置には河副氏の城館である三重生城が存在していたと推測されるため、天文五年開基時には、おそらく小字正法寺に位置していたと考えられる。その後の寛文三年、丹山和尚が荒廃していた三重生城跡の現地に再興したと推測される。しかし正法寺の創建は天文五年以前の可能性が十分ある。現在正法寺蔵の絹本着色仏涅槃図は鎌倉時代の作であるため正法寺の創建は鎌倉時代以前と考察できなくもないが、必ずしも当該涅槃図が当初より正法寺に納められていたかどうか詳らかではない。しかし、今回小字正法寺に隣接する当該遺跡より瓦類(図3)が出土したことを鑑みれば正法寺が鎌倉時代以前に実在した可能性も十分考慮する必要がある。

古代の瓦出土遺跡の性格について 近江において現在60を越える数の古代寺院が想定されている。(文献3)これらの古代寺院の中には、瓦を除く寺院関連の遺構や遺物が伴わない例も多い。^②一方で、寺院以外の性格が想定される遺跡から少数の瓦が出土する例も散見できる。とりわけ赤野井湾遺跡出土例は、船を用いて瓦を生産地から消費地への運搬途中に何らかの原因で埋没したものと見られる。赤野井湾遺跡の例は、瓦の出土が必ずしも遺跡の性格を寺院あるいは瓦窯に限定するべきではないことを示している。

今回報告した資料についても、瓦の出土をもって寺院跡あるいは瓦窯に限定して考えるべきではなく、遺跡の性格については資料の増加を待って改めて検討したい。

古代交通との関連について 図3の軒丸瓦においては、高島町大字横山字唐木谷出土の軒丸瓦と同型と思える程、極めて類似している。^③遺物採集地の性格は判然としないが、当該地の西側を通る里道(巾約1.8m~3m)は、安曇川町田中付近から泰山寺丘陵を抜けて朽木谷さらには若狭へと通ずるものである。若狭と近江を繋ぐこの交通路の存在を重視するならば、瓦採集地との関連も考察すべきであろう。古代交通路から古代寺院の立地を解明する研究(文献4・10)が多大な成果を上げている中で、このような視点からの研究についても今後の課題としたい。

(中村 英世・重岡 卓)

末筆になりましたが、本報告をまとめるにあたってご協力頂いた以下の方々に感謝の意を表して資料報告の結びとさせていただきます。(順不同・敬称略)

横田三千太郎・白井 忠雄(以上高島町歴史民俗資

料館)・三矢 次浩(安曇川町教育委員会)

註

- ① このうち後二者は、それぞれ軒丸瓦が1点ずつ出土したのみで、寺院の存在は確定的ではない。
- ② 代表的な例として、古代栗太郡衙跡とされる岡遺跡(文献12)や、集落遺跡である中兵庫遺跡、運搬途上のものと考えられる赤野井湾遺跡(文献13)をあげることができる。
- ③ この資料については、現在未報告であるが、機会を改めて報告する予定である。

引用文献

〈凡例〉 財滋賀県文化財保護協会→県協会
滋賀県教育委員会→県教委
安曇川町教育委員会→町教委

1. 『町内遺跡分布調査報告書』町教委 1988
2. 『平成7年度滋賀県遺跡地図』県教委 1995
3. 小笠原好彦・西田弘・田中勝弘・林博通『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989
4. 内田保之「近江国の古代駅路と官衙遺跡について」『紀要』第9号 県協会 1996
5. 『栗東町岡遺跡発掘調査報告書』県教委・県協会 1996
6. 第5回埋蔵文化財調査研究会シンポジウム「古代の十字路」資料 県協会 1992
7. 重岡卓「高島郡の古代寺院」『紀要』7号 県協会 1994
8. 『下五反田遺跡発掘調査報告書』町教委 1995
9. 『高島郡誌』滋賀縣高島郡教育會 1947
10. 畑中英二「古代における琵琶湖の水上交通についての予察」『紀要』第9号 県協会 1996
11. 内田保之「高島郡の古代北陸道」『紀要』第7号 県協会 1994
12. 『岡遺跡発掘調査報告書』栗東町教育委員会・(財)栗東町文化体育振興事業団 1990
13. 『赤野井湾遺跡』県教委・県協会 1998
14. 『下五反田遺跡発掘調査報告書』県教委・県協会 1997

参考文献

第11回企画展—滋賀・高島郡展—「湖西の歴史と風土」展示パンフレット 町教委ほか 1997